

アマモの種とともに海に還った柳哲雄先生

厳しい残暑がまだ抜けきらない 2023 年 9 月 28 日の昼下がり、漁船が居並ぶ岡山県備前市の日生（ひなせ）漁港の広場には、中学生や高校生の笑顔や時に歓声が広がり、日生町漁業協同組合の漁師さんや関係者など 100 人ほどが集まった。この日、ここでは、日生中学校の 1 年生約 30 人、岡山学芸館高校 1 年生の約 30 人が、校外学習の一環として、漁師さんたちのサポートや指導も受けながら、日生では 35 年ほどの歴史があるアマモの種まきを行った。高校生を率いるのは、柳哲雄先生のご子息、岡山学芸館の柳雅之教諭である。実は、この日、アマモの種まきと同時に柳哲雄先生の散骨式が行われたのである。柳先生が 2022 年 7 月 2 日に急逝されてから、1 年 3 ヶ月が経とうとしていた。

生徒たちは、まず、6 月頃から海の中に漬けておいたアマモの花枝（かし）から成熟したアマモの種を選別する作業を行った。漁協の作業場では、水しぶきが上がり、時に悲鳴も飛び交う。選別されたアマモの種は充実していて、噛んでみるとお米の生粳（なまもみ）のような感触であった。腐塾して真っ黒になったアマモの葉や茎の部分も集めてまた海に戻す。

午後 3 時ごろ、生徒たちは選別したアマモの種を携えて 11 艘の漁船に分乗し、波しぶきをあげて鹿久居島の千軒湾に向かう。かつて「日生千軒漁師町」と謳われるほど栄えた故事に由来する千軒湾が、この日のアマモの種まきと散骨式の会場である。散骨式の参加者は、漁協の天倉専務理事が船長を務める最後の漁船に乗船して会場に向かった。メンバーは柳先生のご親族が、雅之氏、柳先生の実弟（雅之氏の叔父）、実姉（雅之氏の伯母）ご夫妻、これに里海づくり研究会議から田中丈裕事務局長と筆者（松田治、理事長）が参加した。里海概念、考え方の初めの提唱者として知られる柳哲雄先生は、著名な海洋物理学者であるとともに、里海づくり研究会議の副理事長として、長年、里海づくりの普及拡大にも尽力されたのである。

漁船が千軒湾に到着すると、生徒たちはアマモの種をまき始めていた。漁船の甲板上に即席の祭壇が設けられ、柳先生の遺影が掲げられた。遺影の前で、白い粉末に姿を変えて小さなビニール袋に収まった柳先生は、いつになくお行儀よく畏まっているようにも見えた。雅之氏から天倉氏まで 7 名全員が順に散骨を行うと、柳先生は風に舞い波に揺られながら意外に速やかに沈んでいった。柳先生は前途ある中高生にまかれたアマモの種とともに、「アマモ場再生の聖地」や「里海の町」とも呼ばれる、ゆかりの深い日生の海に還ったのである。セレモニーを一通り終えると、肩の荷を下ろした雅之氏が、「ようやくホッとした」と笑顔を見せたのがとても印象的で、こちらもホッとした。

さて、輪廻転生とか化身（生まれ変わり）などという、いささか、宗教めくが、元素レベルの物質循環の観点からすれば、柳先生の一部が姿を変えながら移動してゆくことは、むしろ当然である。来年の春には、勢い良く芽吹くアマモの新芽になっているかもしれない。やがて流れ藻となり、自身が研究した潮汐流や潮汐残差流に乗って瀬戸内海から外海へ出てゆくことにもなろう。これらは、自らが里海の要因として重視した

「太く滑らかな物質循環」の一部となることを示すとともに、ご自身の研究や里海が瀬戸内海から世界に展開していった状況をも彷彿とさせるものである。

近年、世間では散骨が増えているとも聞くが、今回のセレモニーは、単なる散骨式の範疇を大きく超えた、海に戻る「還海式」でもあった。柳先生は、「海のゆりかご」とも呼ばれるアマモ場で母なる海に戻ったのである。日本語では「海」の中に「母」があり、フランス語では母 La mere の中に海 La mer があることを詩にしたためたのは三好達治であった。長い進化の歴史からすれば、陸上生物は海の中から生まれてきた。その意味でも海は母なる海である。この日、自由人でもあった柳先生は、母なる海の中で永遠に自然な活動を開始したのである。その意味で、この日の大袈裟でなく記念すべきセレモニーは、実に意義深く柳先生ならではの柳先生に相応しいものであった。合掌。

(松田 治：里海づくり研究会議 理事長)



千軒湾でアマモの種をまく生徒たち (筆者撮影)



千軒湾で散骨する柳雅之氏 (柳 雅之氏 提供)



漁船に設けられた即席の祭壇と柳先生の遺影
(柳 雅之氏 提供)